

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

⑥0

高橋 基

前回、三浦綾子さんが、昭和十四年、わずかに十六歳十一月の若さで、当時の歌志内村の神威小学校の先生になったことを紹介した。

三浦綾子さんが亡くなる年の一月一日付けの三浦光世さんと、綾子さんのサインがある、写真①の『ひかりと愛といのち』（平成十年、岩波書店刊）を頂戴した。感激して、巻頭の一文を讀むと、初めて赴任した学校名が、「神威小学校」となっている。このルビは、「かもい」が正しく、「かもい」は誤植であることに気がついたのである。旭川の人は、神居古潭の関連で、「神威」は誤植であっても自然と受け入れることができるが、歌志内の人が讀むと、憤慨するのではないかと心配をしていた。地名とはそういう存在なのである。名門出版社の岩波書店とし

ては、珍しい誤植であった。

たまたま、旭川のカムイコタン表記とカモイコタン表記の問題を取り上げていた関係と、昨年は三浦綾子さんの生誕九十周年記念の年であったので、その最後の月に掲載させていただいたのは幸いであった。

歌志内市の字名の神威については、前回紹介したように、町制施行を機に、町が字名改正を申請し、それを受けて、北海道庁告示で、「神威」と、わざわざ「カムキ」とルビを付されたにも関わらず、「カモイ」「かもい」と

「いずれにし

ても昭和十六年告示された『かもい』は、

実際には使われておらず、もっぱら『かもい』が一般化して使用されて

いることは、まことに皮肉な現象で、地名などは一片の通牒や告示では、容易に変えがたいものをもっているということに興味あることである。」

旭川のカムイコタン⑬



①三浦綾子さんのサイン本

町は旧来の読み方を通したのである。昭和十六年当時で、北海道庁の告示を遵守しないというのは、相当の事由があったと思われる。

この事に関して、昭和三十九年刊行の『歌志内市史』は、次のように述べている。



②「旭川のカムイコタン探訪」

る。私のアイヌ語地名研究の原点は、ここにあり、その信念のもとに研究を続けている。地名を研究するのは、正に地域の歴史の研究でもある。

右のような趣旨による、同好の研究者の集まりが、私の所属する、「アイヌ語地名研究会」である。この会では、毎年、ア

イヌ語地名研究大会を開催している。平成十八年六月十一日、第十回大会は旭川クリスタルホールで開催。アイヌ語学者の村崎恭子さんの講演があり、午後からは、バス二台を連ねて、「アイヌ語地名フィールドワーク：旭川のカムイコタン探訪」を実施した。写真②は、その時の記念写真である。参加希望者が多く、貸切バスを二台追加しての探訪は、昨年で十六回目の大会であるが、最高の参加人数であった。それだけ旭川のカムイコタンは、歴史・景観ともに魅力のある所であるという証左でもあった。

次回からは、再びカムイコタンの個々のアイヌ語地名の地名解を開始。まず、シケウシナイから報告する。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します